



巻頭言

「静かなクルマの中で紫煙を楽しみながら・・・」

(財)日本植物調節剤研究協会 評議員
八洲化学工業株式会社 常務取締役

大塚範夫

近頃の技術革新で驚いたことの一つに自動車のハイブリッド化があります。ガソリンに変わる内燃機関の新しい技術については、多種あるようですが、ガソリンエンジンとモーターによるハイブリットを商品ベースで実用化し、量産車として世に出したことは、日本が世界に誇れる技術の一つであるとのこと。また、ハイブリッドとは異なりますが、自動車の排気ガスが、東京都内の交通量の多い交差点の空気よりきれいである車の記事を目にし、環境に配慮した技術が商品価値の重要な要因であることを痛感しました。

他に、一般の人に環境問題をわかりやすく解説しようとしているホームページで、環境問題を様々な視点で取扱っており、拝見していて非常に勉強になりますが、この中でもハイブリッド車について定期的に掲載されておりました。

このように、近年は、環境に対する負荷を下げる技術、法規制や、京都議定書のような国際的な動きも活発化しており、“環境”は重要なキーワードであると思います。

農業分野でも、環境保全型農業についての指針があり、食糧事情が悪く、食料の安定供給を目指した時代から、環境と調和した農業生産へと移行してきております。先日、ある講演会の中で1961年に制定された旧農業基本法と現在との違いの話があり、私位の年代の者からすると産業としての農業が置かれた立場の変化に対して隔世の念を禁じえません。

農薬については、平成16年より再登録時に新

しいテストガイドラインによる、水産動植物に対する影響試験等の成績提出が必須となっています。これは、農薬の環境生物に対する影響を明らかにすることを目的にしたものですが、農薬の登録維持にも環境に関する追加項目が出てきており、また、生物多様性国家戦略で環境保全型農業の推進、環境生物に関する農薬の評価についての話題もあり、農薬も“環境”というキーワードの中での対応をしていかなければならない状況になっております。

一方、防除に関しては、生物的防除、耕種的防除、害虫の総合防除管理など、以前は言葉として語られてきた事が、実際の防除作業の中でどのように位置づけていくのかが問われる中、新しい防除技術が開発されてきています。今後は、環境の対する負荷を極力減らした農薬の創製が新しい方向のひとつであるようにも思われます。

時代は急激に変化しており、悠長に構えていることはできませんが、冒頭に書いた、ハイブリッド車は、モーターで駆動するため電池の充電、または負荷がかかったとき以外はエンジンが掛からないそうです。以前は静かな車は、高級車しかないというイメージがありましたが、どうやら時代は高級車でなくてもエンジン音がほとんどしない車を私たちにも届けてくれました。そんな静かな車中で煙草でも吸いながら紫煙を楽しみつつ、今後の農業の行く末、防除のあるべき姿について考えてみてはどうかなどと思っています。